

左京六条二坊の調査

第131次

1 はじめに

本調査は、平成12年度（2000年度）から開始された農林水産省近畿農政局による高所寺池堤防改修工事に伴うもので、平成15年度（2003年度）の発掘調査である。発掘調査は、池堤防改修工事に伴う西区・東南区と、奈良文化財研究所が学術調査の必要性を考慮し調査区を設定した東北区とに分かれる。発掘面積は、西区930㎡、東北区735㎡、東南区298㎡の、合計1963㎡である。調査期間は2003年10月21日～12月25日（西区・東北区）、2004年1月30日～2月16日（東南区）である。

2 検出遺構

西区 調査区は南北73m、東西30mのL字形をなす。古墳時代の遺構、中世の遺構、明治以来の遺構を検出した。

古墳時代の遺構としては、古墳の溝SD9870、SD9871を検出した。SD9870、SD9871とも6世紀前半の遺物が出土。

SD9870は、内側の直径20m、外側の直径22.5mの古墳周濠である。溝幅は最大で2.5mを測る。堆積土は灰褐色粘質土と茶灰粘質土の互層で、厚さ0.4m。溝内から須恵器高杯・甕、土師器甕・ミニチュア壺が散乱した状態で出土した。次にSD9871は、内側の直径17.5m、外側の直径20mの古墳周濠であり、その溝幅は最大で1.3mである。堆積土は茶褐粘質土と灰褐粘質土の互層で、厚さ0.3mである。溝の最下部から土師器高杯が出土した。

藤原京の条坊遺構としては、発掘区北端から南へ10mの位置が六条大路南側溝の検出予定地であったが、中世以降の遺物包含層である灰褐色粘質土が地山面上にあり、藤原宮期の遺構は削平を受けて、検出できなかった。

中世の遺構としては、東西溝1条、井戸7基が主要なものである。東西溝SD9875は発掘区の北を東北に通る幅1.1～1.5m、深さ0.6mの溝で、溝底は水平で、溝横断面は逆台形をなす。

井戸7基は、北西から南東へ向かって述べる。SE9880は井戸掘形直径1.1m、井戸内径0.4m、掘形はほぼ円形。内径は不規則な多面形八角形。井戸の深さは1.6m以上となる。下から直径0.45～0.5mの曲物を3段積み上げ、その上に縦板を8枚組み合わせさせて変形八角形をつくる。

SE9882は上半部が井戸抜き穴で、下半部は曲物を4段残す。井戸の深さは1.6m。曲物は最下段の直径0.38m、最上段の直径0.54mと次第に大きくなる。井戸掘形は直径1.1mで、裏込めに多くの曲物底板を入れ込んでおり、これにより井戸に使用した曲物側板が再使用の曲物であることがわかる。このSE9882は西側のSE9881を切る。

SE9883は径1.8～2.6mの台形の掘形をもち、西側に偏して径0.6mの円形に0.55m掘り下げ、下から5段の曲物を積み上げる。井戸の深さは1.6m。最上段の曲物と重なって、縦板の痕跡を残し、SE9880と同じく曲物の上に縦板組がなされていたことがわかる。

SE9884は上部で直径2.3mの円形の掘形をもち、中央に0.4mの曲物を5段積み上げる。このうち下4段は比較的板が厚く、残りはよい。この段まで曲物を積み、その後、割り込みのある横板でいったん四角を組み、さらに上に薄い曲物を一段積む。現状の井戸の最上段に円形に石列

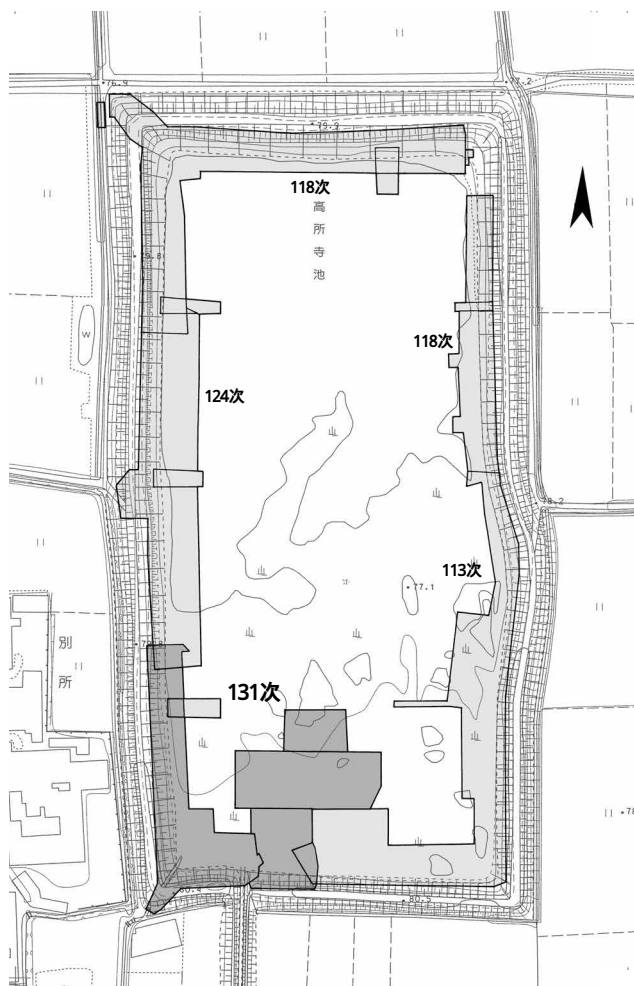


図113 第131次調査位置図 1:2000

が巡り、これは曲げ物側板と縦板組との境であり、井戸の最上部はさらに上にある。井戸の深さは2mである。

SE9885は直径0.85mの円形の掘形をもち、東に偏して径0.4mと小さく円形に掘り下げ、そこに曲物を据える。現存する曲物は4段である。SE9885は東側のSE9886を切っており、SE9886は先行する古い井戸の抜き穴である。

明治以来の遺構には、高所寺池の導水口としての遺構SX9890がある。導水口の全体の形は不明で、最下部の2段の石積みが残る。石積みは長さ0.5~0.7m、幅0.2~0.4mの花崗岩を2段残す。石積みの北方下位に、杭列を密に配す。杭は120本以上に及び、導水口より入るゴミの濾過を杭列で行ったものと判断できる。（山崎信二）

東北区 南辺の約東半分は113次調査区に隣接する。調査区の西側3分の1では、池の堆積土の直下に砂礫とシルトの互層が広がる。この付近では、遺構を一切確認できなかったが、SX9890や現在の導水口からの水流による影響と考えられる。それ以外の部分では、表土である池の堆積層の直下で古墳時代と中世の遺構を検出したが、藤原宮期の遺構は検出されなかった。

東北区のほぼ中央で検出された古墳周濠SD9850は、残存値で最大幅2.25m、深さ0.56mをはかる。残存する内径は21m、外径は直径23m。同様の遺構SD9870、SD9871が隣接していることから、円墳と考えられる。溝の底からは、赤色顔料の付着した土師器甕や須恵器高杯、

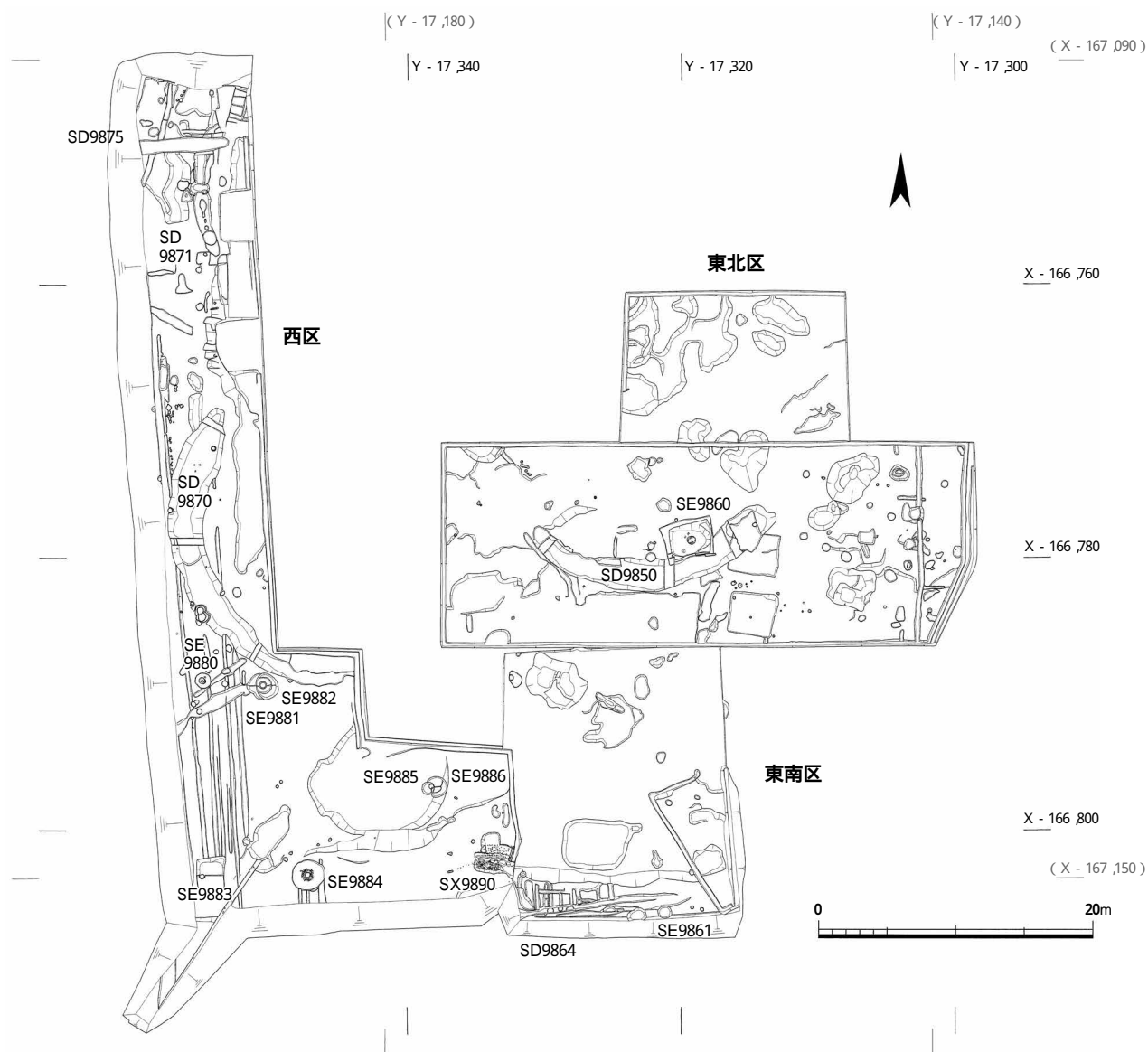


図114 第131次調査遺構図 1:500

埴輪などが出土した。

SE9860は、溝SD9850の一部を壊して造られた中世の井戸。上部は削平されている。残存する平面形は3.85m×2.8mの長方形で、深さは1.19m。曲物を利用した井戸枠は、下2段が残っていた。井戸底には灰色の粗砂が堆積し、曲物の中には、拳大の川原石が詰められていた。掘取穴の埋土には井戸枠の細片と瓦器や土師器小片が多く混じる。

(飛田恵美子)

東南区 調査区は西区、東北区及び113次調査区に隣接する。遺構は調査区南端から北へ約2mの範囲で検出した。それより北は地形が1段下がり、池の堆積層である青灰色粘質土が地山面上にのる。藤原宮期の遺構面は削平をうけており、検出できなかった。

検出した遺構は東西溝4条、南北溝11条、井戸1基であり、すべて中世のものである。南北溝SD9864は埋土に粗砂を含み、流水の痕跡がみられる。SE9861は円形の掘形をもつ素堀の井戸で、深さは1.1mを測る。このほか調査区北側で土坑を4基検出したが、遺物を全く含まないため、性格は不明である。

(渡部圭一郎)

3 出土遺物

土器 弥生時代～中世の土器が出土したが、主体をなすのは、古墳時代の土師器・須恵器と、中世前半期の土器である。藤原宮期の土器はほとんど出土しなかった。

古墳時代遺構SD9850では、溝底からは赤色顔料の付着した5世紀後半の土師器甕や壺が、上層からは6世紀後半代の須恵器高杯脚部が出土した。SD9870には、比較的多量に出土した土師器甕やミニチュア土師器の壺・須恵器高杯・中型甕が出土している。須恵器高杯は口縁端部に緩やかな段をもつ。同甕は外面に細い平行タタキを施し、内部は同心円の当具痕を丁寧にスリ消す。6世紀前半代。SD9871からは、土師器高杯が7個体分出土した。いずれも椀形の杯部をもつものであるが、杯部がやや浅いものが多いのが特徴である。6世紀前半代に属する。

井戸からは多くの瓦器片や土師器が出土している。とくに瓦器椀は、口径が12～13cm程度で、高台部分は非常に小さな断面三角形をなすものがほとんどである。口径が10cmを下回るものも1点ある。13世紀後半～14世紀と考えられる。

埴輪 埴輪は、約300片と大量にある。円筒・朝顔形が

大半を占め、形象埴輪は、家形埴輪の破片が1点あるのみである。7割は東北区SD9850やその上面から集中的に出土した。比較的高い断面台形の突帯をもつ。無黒斑で、口縁部に「～」字形のヘラ記号がある。5世紀後半。一方、西区では埴輪の出土量は少ない。SD9850出土と同巧品も含まれるが、大半は窖窯焼成で低く幅広の台形突帯をもち、「//」形のヘラ記号がある。6世紀初頭。東北区から出土した5世紀後半の埴輪は、SD9820を周濠とする古墳に伴うものであろう。

瓦 類 古代から近世にかけてのものが出土した。

木製品 井戸枠に用いた曲物以外に、井戸SE9842の埋土より曲物の底板を転用した漆ヘラと考えられる製品と、同裏込めよりヘラ或いは杓子と推定される製品がある。

その他 焼土塊18点、スラグ3点、用途不明の金属製品1点、サヌカイト製剥片5点、未加工の石英3点が出土した。

(飛田)

4 まとめ

今回の調査成果の主要な点は、古墳の検出と中世の遺構である。古墳は径20m前後の円墳を3基密接した状態で検出した。検出したのは周濠状のくぼみSD9850・SD9870・SD9871のみであり、墳丘の盛土などは残っていない。溝内での遺物の出土状態をみると、SD9870では主として埋葬主体部に副葬された土器が主体部の破壊とともに溝内に落ち込んだ状態であり、SD9850での5世紀前半の埴輪と6世紀前半の須恵器高杯の出土も、ある時期に溝が埋められたことを示す。溝内堆積土が固く締まっていることからみて、藤原京造営に際して古墳が破壊され、溝が埋められたとみて良いであろう。一方、SD9871での土師器高杯の出土状態をみると、一ヶ所に集中して溝底部に据え置かれており、古墳時代の状態をそのまま残している可能性が強い。

次に中世の遺構であるが、発掘区の北側を幅1.5m程の溝が東西に走り、その南に井戸が集中している。今回出土したものだけでも、作り替えを入れれば8基であり、発掘区のさらに東側の第113次調査でも3基の井戸を検出している。これは高所寺池の南3分の1の地区では主として14世紀代の集落があり、集落の建物跡は削平されて残されていないが、集落の北限に近い溝や井戸底3分の2程度のものが残されたとみて良いであろう。

(山崎)